ゴーゴリと＜レノーレ譚＞

飯　田　梅　子

はじめに

ゴーゴリ（Николай Васильевич Гоголь, 1809-1852）は、田園抒情詩『ガンツ・キュヘリガルテン』（*Ганц Кюхельгартен*, 1827年執筆、1829年発表）、中篇『イヴァン・クパーラの前夜』（*Вечер накануне Ивана Купала*, 1830）、『五月の夜、または身投げした娘』（*Майская ночь, или Утопленница*, 1829-1830年執筆、1831年発表）、『クリスマスの前夜』（*Ночь перед Рождеством*, 1832）、『恐ろしき復讐』（*Страшная месть*, 1831年執筆、1832年発表）、『ヴィイ』（*Вий*, 1835）など、一連の初期作品において＜レノーレ譚＞（＜死者が愛する者を墓場から迎えにやってくる＞プロットをもつ作品）、[1] あるいはその後継ジャンルとみなされる＜吸血鬼譚＞のモチーフを採りいれた。

ゴーゴリ作品における幻想性、ドイツ・ロマン派の影響などについては、既に膨大な研究の蓄積がある。とりわけその幻想の詩学は、20世紀初頭のロシア象徴派詩人や作家、さらにはその後フォルマリズムの理論家たちを魅了し、すぐれた研究や独創的作品をうみだす原動力となった。[2] ソヴィエト時代の研究

---

1 ＜レノーレ譚＞は、ドイツ詩人ビュルガー（Gottfried August Bürger, 1747-1794）のバラッド詩『レノーレ』（*Lenore,* 1774）のヨーロッパにおける大流行をきっかけに広まった。詳しくは以下を参照されたい。拙稿「ロシアにおける『レノーレ』受容」『文化と言語』第75号、2011年、137-172頁。

2 *Розанов В.В.* Легенда о великом инквизиторе Ф.М. Достоевского // Мысли о литературе. М., 1989. С.41-157. ; *Розанов В.В.* О Гоголе (Приложение двух этюдов) // Мысли о литературе. М., 1989. С.158-166. ; *Белый А.* Мастерство Гоголя. М., 1996. ; *Анненский И.Ф.* Книги отражений. М., 1979. ; *Мережковский Д.С.* Гоголь и черт (Исследование) // В тихом омуте : Статьи и исследования разных лет. М., 1991. С.213-309. ; *Тынянов Ю.Н.* Достоевский и Гоголь (К теории пародии) // Архаисты и новаторы. München. 1967. С.412-455. ; *Эйхенбаум Б.М.* Как сделана «Шинель» Гоголя // О прозе. О поэзии. Сб. статей. Л., 1986. С.45-63.

では、ゴーゴリ作品の幻想性はリアリズムの完成に寄与する一要素と読み替えられたが、バフチン、マンなどの労作により、リアリズム一辺倒ではないゴーゴリ解釈が再び見直されることとなった。[3]

本邦でも、早くから宇野浩二、後藤明生などの作家によるゴーゴリ論、神西清、川端香男里などの論考、欧米の研究をふまえた青山太郎による伝記的大著、秦野一宏、諫早勇一、伊東一郎などによるテクスト分析やフォークロア研究により、ゴーゴリの幻想・ロマン派的要素にまつわる多くの謎は解明されつつある。[4]

しかし、ゴーゴリとゴシック小説、[5] ジュコーフスキイ（Василий Андреевич Жуковский, 1783-1852）の影響などに関する研究はまだ限られており、なかで

---

3 *Бахтин М.М.* Рабле и Гоголь: (Искусство слова и народная смеховая культура) // Собрание сочинений. Т.4(2). М., 2010. С.509-521. ; *Манн Ю.В.* Поэтика Гоголя // Творчество Гоголя. Смысл и форма. СПб., 2007. 近年では *Вайскопф М.Я.* Сюжет Гоголя : Морфология. Идеология. Контекст. М., 1993.など。

4 宇野浩二「ゴオゴリ」『宇野浩二全集』第10巻、中央公論社、1973年、168-314頁。後藤明生『笑いの方法　あるいはニコライ・ゴーゴリ』中央公論社、1981年。神西清「ゴーゴリの魔」「ゴーゴリの継承」『神西清全集』第５巻、1974年、609-629頁。川端香男里「ゴーゴリの魔」「不能者の幻想　ゴーゴリの魔Ⅱ」「ゴーゴリ的伝統」「魔の系譜　ゴーゴリ的伝統Ⅱ」「ペテルブルグの神話　ゴーゴリ的伝統Ⅲ」『薔薇と十字架　ロシア文学の世界』青土社、1981年、19-66頁。青山太郎『ニコライ・ゴーゴリ』河出書房新社、1986年。このほか、本稿でとくに参照した論文は以下のとおり。諫早勇一「ゴーゴリの『ヴィイ』の材源をめぐって」『人文科学論集』第15号、信州大学人文学部、1981年、139-145頁。秦野一宏「ゴーゴリにおけるスターン的なるもの」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第11集　文学・芸術学編、1984年、103-112頁。伊東一郎「ゴーゴリとウクライナ・フォークロア」『ヨーロッパ文学研究』第24号、早稲田大学文学部、1976年、91-112頁。伊東一郎「≪ヴィイ≫－イメージと名称の起源」『ヨーロッパ文学研究』第32号、早稲田大学文学部、1984年、１-16頁。伊東一郎「ゴーゴリ－ウクライナ・バロック－民衆文化（M. バフチン『ラブレーとゴーゴリ』に寄せて）」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第39輯　文学・芸術学編、1993年、79-92頁。伊東一郎「ウクライナ文学史におけるゴーゴリ－『ソローチンツィの定期市』のエピグラフを手掛かりに－」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第50輯第２分冊、2004年、67-84頁。

5 ゴーゴリとゴシック小説について、詳しくは以下を参照。*Самородницкая Е.И.* «Британской музы небылицы» : Об отношении Гоголя к готическим романам // Гоголь как явление мировой литературы. М., 2003. С.305-310. ; *Самородницкая Е.И.* Н.В. Гоголь и Ч.Р. Метьюрин // Готическая традиция в русской литературе. М., 2008. С.86-105. ; *Малкина В.Я.* «Страшная месть» и «Замок Отранто» Г. Уолпола // Готическая традиция в русской литературе. М., 2008. С.106-111. ; Priscilla Meyer, “Supernatural Doubles: Vii and The Nose”, Neil Cornwell, *Gothic-fantastic in Nineteenth-century Russian Literature,* Amsterdam, Atlanta, Rodopi, 1999, pp.189-209. ; Ignat Avsey, “The Gothic in Dostoevskii and Gogol : The British Connection”, *Gothic-fantastic in Nineteenth-century Russian Literature,* pp.213-233. ; 吉川宏人「ゴーゴリとゴシック」『言語文化研究』第６号、東京外国語大学大学院外国語学研究科言語・文化研究会、1988年、35-41頁。

も＜レノーレ譚＞の影響については、わずかに近年の本国での研究において言及されるにとどまっている。[6] ゴーゴリの作品、書簡、批評、伝記などを丹念にたどると、予想外に多くの＜レノーレ譚＞のモチーフにいきあたる。たとえば、作家が後半生を捧げた未完の長篇『死せる魂』（*Мертвые души, Первый том*, 1835-執筆、1842年発表）に、次のような一節がある。

> 多くの者は教養がないわけではなかった。裁判所長は当時まだ最先端だったジュコーフスキイの『リュドミーラ』を諳んじていて、多くの箇所を巧みに朗誦してみせた。とりわけ「松林は寝入り、谷もまどろむ」だとか、「しっ！」という詩句など。おかげで、ほんとうに谷がまどろむかに思われた。その際、彼は極力情景を髣髴させようとして目を細めるのだった。（VI, 156）[7]

なぜここでジュコーフスキイが引用されるのか。それも、なぜロシア最初の『レノーレ』翻案詩『リュドミーラ』（*Людмила*, 1808）なのか。

本稿では、伝記的事実を参照しながら、ゴーゴリ作品における＜レノーレ譚＞や＜吸血鬼譚＞のモチーフを概観する。それにより、ジュコーフスキイ、カテーニン（Павел Александрович Катенин, 1792-1853）、プーシキン（Александр Сергеевич Пушкин, 1799-1837）、レールモントフ（Михаил Юрьевич Лермонтов, 1814-1841）らに継承されたロシア＜レノーレ譚＞の系譜に、ゴーゴリもまた位置づけられることを例証したい。

---

6 *Дмитриева Е.Е.* «Пожив в такой тесной связи с ведьмами и колдунами...» (Об особенностях гоголевского фольклоризма : «Вечера на хуторе близ Диканьки») // Н.В. Гоголь и мировая культура. М., 2003.

7 ゴーゴリの作品からの引用は *Гоголь Н.В.* Полное собрание сочинений в 14 томах. М.-Л., 1937-1952. により、（　）内に巻数と頁数をローマ数字とアラビア数字でそれぞれ記す。和訳は拙訳によるが、以下を参考にした。『ゴーゴリ全集』河出書房新社、1977年。『ディカーニカ近郷夜話　前・後篇』平井肇訳、岩波書店、1937年。『妖女（ヴィイ）』原卓也訳、東京創元社、1969年（『怪奇小説傑作集　5』所収）。

1．＜レノーレ譚＞の先人たち：ジュコーフスキイ、プーシキン[8]

1831年夏、首都で猛威をふるうコレラ禍にともない、ペテルブルグ在住の貴族の大半は近郊のツァールスコエ・セローに避難した。そのなかに、当時すでに文名を確立していたジュコーフスキイやプーシキンの姿もあった。ちょうど住み込み家庭教師の職を得てパヴロフスクに滞在していたゴーゴリは、２キロほどの近距離に位置するツァールスコエ・セローに足繁く通い、急速にジュコーフスキイやプーシキンとの親交を深めていった。各人の間には大きな年齢差があったが（ジュコーフスキイ48歳、プーシキン32歳、ゴーゴリ22歳）、文学への情熱を共有する３人にとって、世代差は障壁にはならなかった。

この夏は、ジュコーフスキイとプーシキンにとって意義ぶかいものとなった。すでに両詩人のあいだではユーモアに満ちたあたたかい信頼関係が長年培われていたが、この年、初めての競作に臨むことになった。半ば冗談まじりにはじまった「おとぎ話」の詩的競作は、ジュコーフスキイの『ベレンデイ王、その息子イヴァン王子、不死身のコシチェイの狡猾、コシチェイの娘マリヤ王女の智慧についての物語』（*Сказка о царе Берендее, о сыне его Иване-царевиче, о хитростях Кощея бессмертного и о премудрости Марьи-царевны, Кощеевой дочери*, 1831）、『眠れる王女』（*Спящая царевна*, 1831）、『鼠と蛙の戦争』（*Война мышей и лягушек*, 1831）、プーシキンの『サルタン王、その息子の栄えある勇士グヴィドン・サルタノヴィチ公、美しい白鳥王女の物語』（*Сказка о царе Салтане, о сыне его славном и могучем богатыре князе Гвидоне Салтановиче и о прекрасной царевне Лебеди*, 1831）として結実した。また、この時には完成しなか

---

8 ゴーゴリの伝記について、詳しくは以下を参照。Гоголь в воспоминаниях современников. М., 1952. ; *Кулиш П.А.* Записки о жизни Николая Васильевича Гоголя. М., 2003. ; *Шенрок В.И.* Материалы для биографии Гоголя. Т.1-4. М., 1892-1897. ; *Аксаков С.Т.* История моего знакомства с Гоголем. М., 1960. ; *Золотусский И.П.* Гоголь. М., 1979. ; *Манн Ю.В.* Гоголь: Труды и дни. 1809-1845. М., 2004. ; アンリ・トロワイヤ（村上香住子訳）『ゴーゴリ伝』中央公論社、1983年。青山太郎『ニコライ・ゴーゴリ』河出書房新社、1986年。ウラジーミル・ナボコフ（青山太郎訳）『ニコライ・ゴーゴリ』平凡社、1996年。

ったが、後年発表された『死せる王女と七人の勇者の物語』（*Сказка о мертвой царевне и о семи богатырях*, 1833年執筆、1834発表）も、この頃に着想を得た作品とみなされている。

ゴーゴリは、故郷ウクライナにあるネージンのギムナジウム（高等中学校）在学時代から、ジュコーフスキイとプーシキンに私淑していた。当代きっての才能の競演に居合わせた青年は、抑えきれぬ知的興奮と歓喜をジュコーフスキイ本人に告白している。

> おとぎ話［『ベレンデイ王の物語』］を既に擱筆され、次のおとぎ話［『眠れる王女』］に着手されたとのことですね。そのおとぎ話の素晴らしい冒頭部分だけで、ぼくはもう頭がどうにかなりそうでした。プーシキンもおとぎ話［『サルタン王の物語』］を書き終えたそうですね！ああなんて素晴らしいのでしょう。これからどうなるのですか？純粋ロシア詩の巨大構築物が聳えつつあるように思います。同じ建築家が、桁外れの花崗岩を基礎部分に敷設し、数世紀先にも誉れあるような壁や円屋根を築くのです。子孫たちは頭を垂れ、歓喜の祈祷所を設けるでしょう。あなた方の運命はなんと素晴らしいのでしょう。偉大な建築家たちよ！（1831年９月10日付）（X, 207-208）

同年秋、ゴーゴリは同郷の親友ダニレフスキイ（Александр Семенович Данилевский, 1809-1888）に書簡をしたためている。

> 夏いっぱい、ぼくはパヴロフスクとツァールスコエ・セローで過ごした。ほぼ毎晩ぼくら、つまりジュコーフスキイ、プーシキン、それにぼくは集まったものさ。ああ、あのような立派な人たちのペンのもとから、どれほど素晴らしいものが溢れ出たか、きみが知り得たらねえ！プーシキンが８行詩で書いた物語『料理女』［『コロムナの家』（*Домик в Коломне*, 1830年執筆、1833年発表）の草稿の表題］には、コロムナのすべて、そ

して生き生きとしたペテルブルグの自然が描かれていた。－それからロシアのおとぎ話も ―『ルスランとリュドミーラ』とはまた違うのだが、しかしまったくロシア風なんだ。あるおとぎ話など、韻律抜きで脚韻だけで書かれているが、想像を絶する素晴らしさだよ。ジュコーフスキイもロシアのおとぎ話を書いた。ひとつは6脚詩で、もうひとつは単に4脚詩で書かれていたが、ほんとうに奇跡だよ！これまでのジュコーフスキイとは全く違う仕上がりだ。新しい大詩人、それも純粋なロシア詩人の出現だ。以前のドイツ趣味は皆無だ。新作バラッド詩は無尽蔵だよ！近日中に出版されるはずだ。(1831年11月2日付)(X, 214)

このような体験が、野心溢れる新進作家の創作に影響しなかったとは考えにくい。むろん、これまでも指摘されてきたように、3者の関係は、基本的には先輩が後輩を庇護、援助するものだっただろう。しかし、それは決して上から下への一方向の関係ではなく、双方向的交流だったのではないだろうか。多くの同時代人が回想するように、ジュコーフスキイは2人の後輩を庇護し、プーシキンはゴーゴリに主題を与えた。しかし、ゴーゴリの方でも2人の大先輩に新鮮な刺激を与えたと考えられる。以下にその軌跡をたどってみよう。[9]

1-1. ゴーゴリとジュコーフスキイ[10]

前述のように、ジュコーフスキイは少年ゴーゴリにとって憧憬の対象だった。少年は、折に触れて詩人の翻案詩や詩作品を手帖にひき写し、熱心に諳んじた。[11]

彼は、格調高く優美なジュコーフスキイの翻訳をつうじて、イギリス・バラッド詩やドイツ・ロマン派作品に親しんだ。

---

9 3者の関係について、以下のような指摘もある。「客観的に見ても、ゴーゴリの関心はプーシキンやジュコーフスキイの創作的志向と接するものだった。このことが彼の心情に影響しないはずがない。それは、自分が“競作”、つまり思想と空想の饗宴において、蚊帳の外に置かれている訳ではないという自信をゴーゴリに与えたはずだ。」(*Манн*. Гоголь. С.224)

10 ゴーゴリとジュコーフスキイの交流について、詳しくは以下を参照。*Манн*. Гоголь. С.220-231. ; *Вайскопф*. С.50-55.

11 ゴーゴリは文学活動を詩作からはじめた。公になった処女作は抒情詩『イタリア』(*Италия*, 1829) であり、処女出版『ガンツ・キュヘリガルテン』は田園詩だった。

ジュコーフスキイに直接ゴーゴリを紹介したのは、ソモフ（Орест Михайлович Сомов, 1793-1833）、あるいはデリヴィグ（Антон Антонович Дельвиг, 1798-1831）だと推測されている。[12] ジュコーフスキイは、ほどなく新進作家を知人のプレトニョフ（Петр Александрович Плетнев, 1791-1866）に紹介し、首都における文学活動の足がかりを御膳立てした。

後年、ゴーゴリはジュコーフスキイとの初めての会見について、後者に宛てた書簡のなかで回想している。

> きみに初めて会ってからもうまもなく20年が経ちます。当時ぼくはまだほんのひよっ子でしたが、きみはすでに文学の道半ばに達していました。あれはシェペレフスキ邸でのこと。あの部屋はもうありません。でもあの部屋のことは小さな家具調度に至るまで、すべて目に浮かぶようです。きみはぼくに手を差し伸べ、将来の戦友を支援する意志を示してくれました。きみの眼差しは何と慈愛に満ちていたことか！... これだけ歳の離れたぼくらを一体何が結びつけたのでしょう？芸術です。ぼくらは普通の肉親などより余程強い血縁を感じたのです。なぜでしょう？双方が芸術の神聖性を感じていたからです。（1848年１月10日付）（XIV, 33）[13]

ツァールスコエ・セローには、ジュコーフスキイやプーシキンと親しくしていた宮廷女官ロセット（Александра Осиповна Смирнова-Россет, 1809-1882）の姿もあった。才気煥発な彼女は、ロシアに移住したフランス人の娘で、若さと美貌で社交界の花形だった。ウクライナ人の乳母に育てられたロセットは、ウ

---

12 クリシュの伝記には「彼はジュコーフスキイへの紹介状を誰かから入手したようだ」とある（*Кулиш.* С.156）。マンは、同郷ウクライナの大先輩ソモフではないかと推測する（*Манн.* Гоголь. С.194）。一方、トロワイヤ、ゾロトゥスキイ、青山はデリヴィクの紹介だとしている（トロワイヤ、76頁。青山、64頁。*Золотусский.* С.109）。

13 ジュコーフスキイは、26歳年下のゴーゴリとは敬称関係を長年崩さなかった（16歳年下のプーシキンとは親称の寛いだ間柄だった）。ゴーゴリからジュコーフスキイ宛ての書簡は67通、ジュコーフスキイからゴーゴリ宛ての書簡は30通のこされているが、文通内での呼びかけが「あなた（вы）」から「きみ（ты）」に変わるのは、ようやく1847年のことである。上記引用書簡はその頃のものである。

クライナ語の詩を諳んじるなど、元来ウクライナに親近感を抱いていた。ゴーゴリともすぐにうちとけ、その友情は生涯保たれた。ロセットの日記に興味深い一節がある。

> プーシキンが話しかけるたびに、ゴーゴリがぱっと顔を輝かせるのに私は気づいた。私がプーシキンをイスクラ（Искра［火花、煌めき］）と呼ぶのを耳にして、本人にぴったりの綽名だとゴーゴリは言った。プーシキンはなんて優しいのかしら。あっという間にあの頑ななウクライナ人を懐柔してしまった！Sweet William こと、モーと鳴き声をあげるブィク（Бык［雄牛、ジュコーフスキイを指す－執筆者註］）と同じくらいに、プーシキンは優しい。[14]

上に引用した「Sweet William」とは、ジュコーフスキイの綽名である。ロセットの日記に註釈をつけた娘オリガ（Ольга Николаевна Смирнова, 1834-1893）は、以下のエピソードを紹介している。

> Sweet Williamとは、ロシア語で野花（полевой цветок）、ナデシコ (дикая гвоздика）のこと。ヴァシーリイ・アンドレエヴィチ［ジュコーフスキイ］は、ロセットにこの花を摘んできたことがある。ヴァシーリイとはウィリアムのこと（Василий－William)。ある時、ジュコーフスキイはナデシコの俗称を知り、メモに Sweet William とサインした。他のメモには「あなたの牡牛（Бык)」「あなたの仔牛（Бычок)」などとサインしている。[15]

---

14 *Шенрок*. T.1. C.323-324. シェンロクによると、ロセットはジュコーフスキイを Sweet William, Бык, Бычок などと呼んでいた。また、プーシキンのことも Сверчок（こおろぎ)、 Искра などと呼んでいた。 Сверчокは、ジュコーフスキイの『スヴェトラーナ』の一節「真夜中の使者こおろぎが／哀れな声を張りあげる（Крикнул жалобно сверчок, / Вестник полуночи）」（III, 33）にちなんで、プーシキンに与えられた綽名だった。（*Томашевский.* Пушкин. T.1. M., 1990. C.99-100）

15 *Шенрок*. C.324.

直接的には、このエピソードをきっかけに、ジュコーフスキイはSweet Williamと呼ばれるようになったのだろう。しかし、ジュコーフスキイがSweet Williamと署名したのは、別の動機も考えられる。Sweet William（愛するウィリアム）は、しばしばイギリスの伝承バラッド、とくに＜幽霊花婿譚＞に謳われてきた形象である。[16] パーシー（Thomas Percy, 1729-1811）が『英国古謡拾遺集』（*Reliques of Ancient English Poetry,* 1765）におさめた『愛するウィリアムの亡霊』(*Sweet William's Ghost*）は、ビュルガー（Gottfried August Bürger, 1747-1794）に『レノーレ』（*Lenore,* 1774）執筆のインスピレーションを直接与えた作品ではないかと推測されている。[17] ３度にわたり『レノーレ』を翻案・翻訳したうえ、イギリス・バラッド詩の翻訳紹介も多く手掛けたジュコーフスキイがSweet Williamを知らなかったとは考えにくい。おそらく『愛するウィリアムの亡霊』とビュルガー『レノーレ』の影響関係も知っており、そのうえで親しい仲間内での署名に愛用したと考えられる。そして、そのことはおそらくプーシキンやゴーゴリも承知していただろう。このように、『レノーレ』や＜レノーレ譚＞に関係するモチーフは、今日われわれが想像するよりもはるかに身近に、プーシキンやゴーゴリのそばに存在していたのではないかと推測される。[18]

---

16 イギリスにおける伝承バラッド、＜幽霊花婿譚＞については以下に詳しい。高橋宣勝『イギリスに伝わる怖い話　英国幽霊怪奇譚』大和書房、2000年。高橋吉文編『歌うメディアーバラーデの世界－』北海道大学、1998年。山中光義監修『全訳　チャイルド・バラッド』１－３巻、音羽書房鶴見書店、2005年。山中光義『バラッド詩学』音羽書房鶴見書店、2009年。原一郎『バラッド研究序説』南雲堂、1975年。美濃部京子「Revenant Balladと昔話」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』第12-3号、1998年、2-5頁。永井豊実「『レノーレ』のケルトの余韻」『城西人文研究』第25巻、1999年、17-19頁。

17 詳しくは以下を参照。糟谷恵次「G.A.ビュルガーの『レノーレ』における詩的影響の諸相」『駒沢女子大学研究紀要』創刊号、1994年、163-164頁。このほか、北方スカンジナヴィアの伝承に起源をもとめる研究もある。『レノーレ』の源泉をめぐる研究については以下に詳しい。栗原成郎「西スラヴと南スラヴにおける“レノーレ”譚」『西スラヴ学論集』第４号、2001年、７頁。文学作品としての『レノーレ』はビュルガーの創作によるものだが、＜死んだ花婿が花嫁を連れ去る＞タイプの説話（AT 365［ATはアールネ／トンプソンの『説話モチーフ索引』の分類番号］）はヨーロッパ各地の民間伝承に広く行き渡っている。

18 むろん、イギリス伝承バラッドに見られるSweet WilliamやFair Margaret（美しきマーガレット）の形象は、ロシア民話のイヴァンとマリヤのように、民族を代表する名前として用いられてきたのだろうが、それでもなおジュコーフスキイがこの綽名で呼ばれたことは注目すべきだと思われる。

1831年、ジュコーフスキイは翻訳と詩作の集大成である2巻詩集『バラッド詩と中篇』（*Баллады и повести*）を発表し、好評を博した。詩集には『レノーレ』の翻案詩『リュドミーラ』（*Людмила*, 1808）、『スヴェトラーナ』（*Светлана*, 1808-1812年執筆、1813年発表）、『レノーラ』（*Ленора*, 1831）の3作品もおさめられた。ゴーゴリも前出のダニレフスキイ宛書簡で言及している。

> きみはジュコーフスキイの新しいバラッド詩を読んだかい。何という魅力だろう！旧作と合わせて2部作、しかも格安だよ。10ルーブリときた。（1832年1月1日付）（X, 218）

後年、ゴーゴリは『友人たちとの往復書簡抜粋』（*Выбранные места из переписки с друзьями*, 1847）所収論文「ロシア詩の本質および特質は結局どこにあるのか」（*В чем же наконец существо русской поэзии и в чем ее особенность*, 1845-1846）において、『スヴェトラーナ』と『リュドミーラ』に言及している。

> 当時、ドイツ文学では奇妙な現象が起きていた。漠たる夢想、神秘伝説、不可解な奇跡的出来事、目に見えぬ暗黒世界の気配、人間の幼年時代につきものの夢と恐怖など。これらがドイツ詩人たちの対象となっていた。（...）ジュコーフスキイは、翻訳をつうじて、独創性を誇る詩人と同等の影響を与えた。それまでのロシア詩には知られていなかった新たな憧れを、不可視の神秘的なものの領域に導入した。そしてそのことによって、他ならぬロシア詩を、思想および思想表現の姿においてのみならず、詩そのものにおける唯物主義から解放した。つまり、詩そのものが軽やかで、幻のように霊的になったのである。また、翻訳によって、あらゆる独創的なものに端緒を開いた。そして、のちに他のロシア詩人が皆用いるようになった新しい形式と韻律を導入した。怠惰な知性のために、彼はとりわけ発明的な詩人にはならなかった ― 何かを考案するという面では怠惰だが、創造力が欠けていたわけではない。創造力の兆しは、既

に文学活動開始当初からはっきりしていた。『スヴェトラーナ』や『リュドミーラ』は、わがスラヴ人気質の熱い響きを初めて広めた。それは他の詩人たちが響かせるどんな音色より、私たちの魂に近しかった。その証拠に『スヴェトラーナ』や『リュドミーラ』は、詩的感覚が未発達だった時期のロシアにおいて、皆に強烈な印象を与えた。ロシア詩の悲歌のジャンルはジュコーフスキイが創出したのである。
（VIII, 376-378）

プーシキンはジュコーフスキイの作品の大半が翻案・翻訳であることを、同じ詩人として非常にもどかしく感じていたようだが（前述のおとぎ話の競作は、プーシキンなりに旧友を鼓舞した賜物だろう）、ゴーゴリは率直に大先輩を尊敬していた様子が伺える。[19]

ゴーゴリと＜レノーレ譚＞、＜吸血鬼譚＞とのかかわりは、プーシキンとの交際によりさらに深まっていく。以下に概観してみよう。

1-2. ゴーゴリとプーシキン[20]

プーシキンとの交流は1831年にはじまる。プレトニョフの紹介だった。『ディカーニカ近郷夜話』第２部（*Вечера на хуторе близ Диканьки, Второй том*, 1832）、『タラス・ブーリバ』（*Тарас Бульба*, 1835）、『検察官』（*Ревизор*, 1836）、『鼻』（*Нос*, 1832-1833年執筆、1836年発表）など、一連の作品はすべて発表前にプーシキンの助言を仰いだ。プーシキンの方でも『コロムナの家』（*Домик в Коломне*, 1830年執筆、1833年発表）、『青銅の騎士』（*Медный всадник*, 1833年執筆、1834年断片発表、1837年発表［死後、ジュコーフスキイ

---

19 ジュコーフスキイの作品の文学的価値については、生前からすでに評価が大きくわかれていた。同時代人の多くは、詩人の紡ぎだす詩句や韻律の優美さ、繊細さ、詩情を高く評価しながらも、独創性の欠如（オリジナルの詩作がほとんどないため）に対しては批判的だった。

20 ゴーゴリとプーシキンの関係について、詳しくは以下を参照。*Розанов.* О Гоголе. С.158-166. ; *Золотусский.* С.106-160, 202-220. ; *Манн.* Гоголь. С.218-231. ; *Гарин И.И.* Пушкин и Гоголь // Загадочный Гоголь. М., 2002. С.561-581.

による修正を経て発表]）、『プガチョフ史』（*История Пугачева*, 1834）などの重要作を、出版前にゴーゴリの前で朗読した。『プガチョフ史』に至っては、草稿をゴーゴリに貸し出すほどの信頼ぶりだった。プーシキンとゴーゴリの交友については多くの先行研究があるので詳細は省くが、ここでは＜レノーレ譚＞、＜吸血鬼譚＞との関わりから二人の交流を振り返ってみよう。

先述のように、1831年夏のツァールスコエ・セローでの交流は、直接、間接に多くの作品に結実した。前出のロセットは当時の交流について、次のように書きとめている。

> 私はゴーゴリに、ヴィイのはなしで私を驚かせた乳母ゴプカの話をした。プーシキンが言うには、ヴィイはギリシア人や南スラヴ人の吸血鬼で、ロシア北方の物語には見られないとのことだった。しかし、ドイツとゲーテびいきのジュコーフスキイは、私たちに『コリントの花嫁』を朗読して聞かせた。[21]

乳母がロセットを驚かせた「ヴィイ」とは、後年『ミールゴロド』（*Миргород*, 1835）におさめられた『ヴィイ』の原型となる形象だろう。作品中でゴーゴリが「グノムの親玉（начальник гномов）」と註釈を加えた「ヴィイ」の由来については、これまでも多様な議論がなされており、ここで改めて繰りかえすことはしない。[22] しかし、ウクライナ人の乳母ゴプカがヴィイの怪談を幼いロセットに語り聞かせたということ、また、プーシキンがヴィイをギ

---

21 *Шенрок*. С.323-324.

22 栗原成郎は、『ヴィイ』という表題にゴーゴリが与えた説明について「メリメばりの文学的粉飾」とし、以下のように説明する。「ウクライナの民間伝承には魔女は知られてはいるが、本来的な吸血鬼やヴィイは存在しなかった。しかし、吸血鬼信仰は十八世紀末頃ウクライナに植民していたセルビア人によってウクライナにも伝えられ、古くからあった魔女伝説と結びついた。「両眼の瞼が地面にまで垂れている」という妖怪ヴィイもまったくのゴーゴリの想像というわけではなく、マケドニアやセルビアの民間信仰には知られており、その重いまぶたがあくとき、恐るべき凶眼によって一瞬のうちに人間や町を灰にしてしまう稲妻の神であった、とも言われる。ただし、この説には確証がない。」（栗原成郎『増補新版　スラヴ吸血鬼伝説考』河出書房新社、1991年、249頁）このほか、『ヴィイ』の材源をめぐっては註45も参照のこと。

リシアもしくは南スラヴなど南方起源の吸血鬼とみなした、という証言は注目に値するだろう。しかも、同席していたジュコーフスキイが、ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）の吸血鬼譚『コリントの花嫁』（*Die Fraut von Korinth,* 1797）を朗読したという事実は、当時ゴーゴリの周囲で＜吸血鬼譚＞が自然に話題にのぼっていたことを示している。おそらく、この頃語られていた「ヴィイ」が、４年後の1835年に中篇『ヴィイ』として結実したのだろう。[23] そうであれば、シニャフスキイ（テルツ）の見解は、なかなか正鵠を射たものと言える。

> なぜ ―『ヴィイ』なのか？この奇妙な表題を前にすると、私はいつも怯み、当惑したものだった。つまり ― この作品は、生ける死者について、またコサック中尉の愛娘の変身と、娘を殺害した不心得者ホマー・ブルートについて語られるのだが、ヴィイに捧げられたわけでもない、相当分厚いこの作品が、なぜあまり関連性のない、わけのわからぬグノムだか何だかに因んで名づけられたりしたのか、ということである。グノムは、ぎりぎり終幕直前に、ほんのエピソード的にちらりと登場しただけで、作品の主要内容には文字どおり何の関係もないのに？[24]

ゴーゴリはヴィイを吸血鬼として描かなかった。『ヴィイ』において吸血鬼の属性を持つのは、コサック中尉の娘（吸血魔女）である。主人公ホマーを惑わせ、ヴィイの凶眼の力を借りて本懐を遂げる（ホマーを彼岸に連れ去る）吸血魔女は、主役ではない。主役はあくまで表題に掲げられたヴィイなのである。前出のシニャフスキイは続ける。

> いやいや、申し訳ないが、本作は［チェーホフの］『中二階のある家』や『ワーニャ伯父さん』、はたまた一連の主要な出来事の接線を撫でる

[23] 創作時期は1834年前後と見られている。
[24] *Абрам Терц*. В тени Гоголя. London. 1975. С.494.

だけのトゥルゲーネフの『煙』とかいう作品とは訳が違うのだ。ゴーゴリの場合、表題は単刀直入であり率直なのだ。内容イコール表題なのである。『肖像画』は肖像画について、『外套』は外套について、『検察官』は検察官について述べられている...。しかも『ヴィイ』は、御覧のように ― 雑駁・凡庸・副次的な作品ではなく、ゴーゴリにとって中心・枢要・根源的な中篇なのである。[25]

炯眼なシニャフスキイが看破するように、ゴーゴリはヴィイを作品の主役に据えた。ただし、吸血鬼の属性をとり除いて。これはどういうことだろうか。作家は、『ヴィイ』の執筆より遡ること4年前にロセット、プーシキン、ジュコーフスキイとともに議論した「吸血鬼ヴィイ」の形象を、「吸血鬼」と「ヴィイ」に分割したのではないだろうか。そうすることで、「ヴィイ」についての独自のおとぎ話創作に挑戦したのではあるまいか。まるで、ジュコーフスキイとプーシキンの競作にひそかに対抗するように。

さらに、ゴーゴリとプーシキン、ゴーゴリと＜吸血鬼譚＞を考察するうえで、もうひとつ見落とせない作品がある。プーシキンの連作詩集『西スラヴ人たちの歌』（*Песни западных славян*, 1828-34年翻訳、1835年発表）である。[26] 詩集は、メリメ（Prosper Mérimée, 1803-1870）の『グズラ』（*La Guzla,* 1827）からの翻案詩11篇、カラジッチ（Вук Стефановић Караџић, 1787-1864）の『セルビア民謡集』（*Српске народне пјесме*, 1824）からの翻案詩2篇、それにプーシキン自身の創作詩3篇、あわせて16篇の連作詩からなる。[27]『西スラヴ人たちの歌』

---

25 *Терц*. С.496.

26 グコフスキイは、ゴーゴリ作品の包含する豊かなフォークロア性が、プーシキンの『西スラヴ人たちの歌』執筆を刺激した可能性を指摘する（*Гуковский Г.А*. Реализм Гоголя. М.-Л., 1959. С.56-57）。

27『西スラヴ人たちの歌』について、詳しくは以下を参照。*Эткинд Е.Г.* Божественный глагол : Пушкин, прочитанный в России и во Франции. М., 1999. С.498-519. ; *Фомичев С.А.* «Песни западных славян» Пушкина // Духовная культура славянских народов. Л., 1983. С.130-145. ; *Курихара Сигэо.* К проблематике "Песен западных славян" А.С. Пушкина. Rusistika : 東京大学文学部露文研究室年報、第4号、1987年、122-133頁。伊東一郎「プーシキン『西スラヴ人の歌』におけるセルビア民謡の翻訳2篇について(1)」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第54輯、2009年、159-174頁。伊東一郎「プーシキン『西スラヴ人の歌』における

と＜吸血鬼譚＞については別の論考で言及したので割愛するが、[28]『グズラ』の連作中に「邪眼」あるいは「凶眼」のモチーフを扱った作品があることを指摘しておきたい。ここでヴィイの「凶眼」を想起することは、それほど唐突な連想ではないだろう。

1827年、メリメは匿名で『グズラ』（正式には『グズラ、ダルマチア、ボスニア、クロアチア、ヘルツェゴヴィナで集めたイリリア語の詞華集』）を発表し、読書界をけむに巻いた。架空の吟遊詩人が語る（騙る）物語詩を仏語散文訳として紹介するという趣向で、当初は大半の読者がメリメの韜晦を鵜呑みにしたようである。表題の「グズラ（GUZLA）」という文字は、メリメの出世作『クララ・ガスルの戯曲集』（*Le Théâtre de Clara Gazul,* 1825）の「ガスル（GAZUL）」とアナグラムになっており、ゲーテは早々にメリメの悪戯を喝破したという。[29]

プーシキンは早くから『グズラ』に大きな関心を寄せ、1828年から1834年にかけて翻案・翻訳に従事したと推測されている。[30] 当時の様子を、ゴーゴリは『メリメ評』（＜*Заметка о Мериме*＞ 1834-1843年執筆、未発表）のなかで、以下のように振り返っている。

> むろんメリメは19世紀フランス文学最高の作家である。プーシキンは彼を大変尊敬していた。プーシキンは、メリメを機知に富む独創的作家であると評し、現在、フランス文学がみじめで哀れむべき衰退に置かれているなかで、彼の作品は素晴らしいものだと評している。(...)メリメが『グズラ』なる表題で出版したスラヴ詞華集は万人の知るところである。

セルビア民謡の翻訳２篇について(2)」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第56輯、2010年、181-189頁。伊東一郎「プーシキンの『西スラヴ人の歌』とメリメの『グズラ』」『ロシア文化研究』第18号、早稲田大学ロシア文学会、2011年、１-30頁。

28 拙稿「プーシキンと＜レノーレ譚＞」『文化と言語』第76号、2012年、119-126頁。

29 浦野進『メリメとロシア作家たち』水声社、2012年、30頁。

30 プーシキンの蔵書には、メリメの『クララ・ガスルの戯曲集』（*Le Théâtre de Clara Gazul,* 1825）、『グズラ』（*La Guzla,* 1827）、『モザイク』（*Mosaïque,* 1833）、『南仏紀行』（*Notes d'un voyage dans le midi de la France,* 1835）が含まれていたという（浦野『メリメとロシア作家たち』29頁）。

> この詞華集によって、メリメはあのプーシキンをも担いだ。プーシキンは詞華集を本物と信じ、きわめて誠実かつ率直に自らの重厚な詩句で表現した。スラヴ魂を感知し推察することは、フランス人には荷が重く、ほぼ不可能である。元来の性質からして、この２国の民族気質は互いに相容れない。しかも、フランス人にとって自分がフランス人だということは片時も忘れ難い。この点、メリメは同国人作家より人間的に遥かに上位に位置する。(IX, 20-21)

メリメに対するゴーゴリの評価は、プーシキンが翻弄された経緯もあってか両義性を併せ持っていたようだが、それでも『グズラ』には一定の価値を認めている。

先述のとおり、ゴーゴリは、まずジュコーフスキイやプーシキンの作品をとおして＜レノーレ譚＞に親しみ、自作に採りいれた。さらに、先輩詩人たちとの直接交流を通じて『コリントの花嫁』や『グズラ』などの作品にも多く触れた。このようにして、直接、間接に血肉化された＜レノーレ譚＞や＜吸血鬼譚＞のモチーフが、初期のゴーゴリ作品に反映されたと推測される。

2．ゴーゴリと＜レノーレ譚＞

ここまで、＜レノーレ譚＞や＜吸血鬼譚＞のモチーフを作品に採りいれた先人たちとゴーゴリの交流について、概観してきた。では、ゴーゴリはこれらの経験をどのように作品に反映させたのだろうか。以下に具体的作品に即して検討する。

2-1.『ガンツ・キュヘリガルテン』

（*Ганц Кюхельгартен*, 1827年執筆、1829年発表）

処女出版『ガンツ・キュヘリガルテン』は、ドイツ詩人フォス（Johann Heinrich Voß, 1751-1826）の『ルイーゼ』（*Luise,* 1798）を模倣した抒景詩だった。アロフ（В. Алов）なる筆名で、並々ならぬ決意と気負いをもって自費出版されたが、当時の主流誌に酷評された。[31]

主人公の名ガンツはドイツ名ハンスのロシア語表記で、姓キュヘリガルテンは当時敬愛していたキュヘリベケル（Вильгельм Карлович Кюхельбекер, 1797-1846）に因んで名づけたという。[32] 出版社による（という触れこみだが、その実ゴーゴリによる）序文には「著者18歳の作品」との但し書が添えられたが、ネージンのギムナジウム在学時代に書きはじめられたと推測されている。

ヴィスマールから２マイルに位置するリュネンスドルフ村に住むガンツは、凡庸な現実に倦み疲れ、幼なじみの恋人ルイーザとその家族を置いて出奔する。見果てぬ夢想に取り憑かれたガンツだったが、ルイーザは出立直後に旅の不首尾を予見していた。

---

[31] 書評は『モスクワ・テレグラフ』（Московский телеграф）誌、『北方の蜜蜂』（Северная пчела）紙の２誌に掲載され、不自然な押韻、貧弱な形容などに批判があつまった。ゴーゴリは即座に残部を回収し、焼却処分した。

[32] キュヘリベケルはドイツ系貴族の子弟。プーシキンのリツェイ時代の同級生。デカブリスト詩人。

Мне снилось: в темной я пустыне,
Вокруг меня туман и глушь.
И на болотистой равнине
Нет места, где была бы сушь.
Тяжелый запах: топко, вязко;
Что шаг, то бездна подо мной:
Боюся я ступить ногой;
И вдруг мне сделалось так тяжко,
Так тяжко, что нельзя сказать...
Где ни возьмись Ганц дикий, странный,
— Бежала кровь, струясь из раны —

暗い荒野にいる夢を見たわ
あたりは霧で人影もなく
沼だらけの平野には
乾く場所もなく
酷い瘴気　どろどろとしたぬかるみ
一歩進めば底なし沼
踏み出すのも恐ろしい
不意に無性に辛くなったの
どうしようもなく辛くて…
と、奇怪なガンツがふらりと現れて
— 傷口から血が迸っていたわ —
(I, 83)

さらに、置き去りにされた夜にルイーザが見る幻影は、ガンツの旅が死出の旅となったのではないかとの印象を強めている。

В небе чудные вот тени
Развилися и свились,
И чудесно понеслись
На небесные ступени.
Прояснилось: две свечи;
Двое рыцарей косматых;
Два зубчатые мечи
И чеканенные латы;
Что-то ищут; стали в ряд.
И зачем-то переходят;
И дерутся, и блестят;
И чего-то не находят...
Всё пропало, слилось с тмой;
Светит месяц над водой.
(…)

空に浮かぶ不思議な影
拡がるかと思えば絡み合い
天のきざはしへと
鮮やかに駆けのぼる
辺りを照らす二本の蝋燭
乱髪の二人の騎士
鋸歯状の二本の刀剣
彫金細工の甲冑
何かを求め並びたつ
なにゆえか位置を変え
相戦い火花を散らす
見つからないものがあるようだ…
全てはかき消え闇に紛れた
水面に輝く月

Вот в стороне глухой кладбище:
Ограда ветхая кругом,

人里離れた墓場の傍ら
とり囲む朽ちた柵

Кресты, каменья... скрыто мхом
Немых покойников жилище.
Полет да крики только сов
Тревожат сон пустых гробов.

十字架　墓石…　苔むした
もの言わぬ死者たちの住処
梟の飛翔と鳴き声だけが
空の棺の眠りを脅かす

Подымается протяжно
В белом саване мертвец,
Кости пыльные он важно
Отирает, молодец.
С чела давнего хлад веет,
В глазе палевый огонь,
И под ним великой конь,
Необъятный, весь белеет
И всё более растет,
Скоро небо обоймет;
И покойники с покою
Страшной тянутся толпою.
Земля колется и — бух
Тени разом в бездну... Уф!

のろのろと起き上がる
白い経帷子の死者
死者が重々しく拭うのは
埃まみれの骨　ブラヴォ！
古めかしい額から漂う冷気
淡黄の火に燃える眼
傍らの途方もなく巨きな
純白の馬は
みるみる成長し
じきに天を捉えんばかり
墓から出た死者たちの
恐ろしい隊列が伸びゆく
揺れる大地　―　鳴り響く轟音
たちまち影は奈落に落ちる…ああ！
(I, 85-87)[33]

ここでルイーザの見る死者の幻影は、何を示唆するのだろうか。月光に乱舞する死者の幻影、白い経帷子を纏う死者、棺から起き上がる死者などのモチーフは、ビュルガーの『レノーレ』、ジュコーフスキイの『リュドミーラ』、『スヴェトラーナ』などで繰りかえし描かれてきた。

ビュルガーの『レノーレ』では、死せる花婿ヴィルヘルムと花嫁レノーレの墓場への道行に、乱舞する死者の影が繰りかえし挿入される。

---

[33] 「夜の幻影（Ночные видения）」と題された陰鬱な章に唐突に挿入された「ブラヴォ！（молодец）」という句について、ナボコフは以下のように述べる。「この最後の突飛な間投詞は、若きゴーゴリの陽気なウクライナ気質がドイツ・ロマンチシズムに勝っていたことをうかがわせる意味で、注目に値する」（ナボコフ、23頁）なお、「ブラヴォ！」という訳語は青山太郎訳を参照した。

ほら　おお　あの刑場のところで
車軸を中心にぐるぐると
月の光におぼろげに
浮んでいる　舞い踊る者たち
「さあ　おい　連中　ここへ来い
俺の後について来い
ふたりのために婚礼の円舞を踊れ
俺たちが寝に就くとき」
(...)
いま　月の輝きに
あたりを円く照らされて
亡霊がぐるぐると輪舞し
歌が吠えるように聞こえた[34]

さらに、ジュコーフスキイの『リュドミーラ』においても、棺から起き上がる死者の輪舞が見られる。[35]

Слышат шорох тихих теней:	静かな影のきぬずれが聞こえる
В час полуночных видений,	夜半のまぼろしの刻
В дыме облака, толпой,	雲の煙に群れとなり
Прах оставя гробовой	遅くのぼった月とともに
С поздним месяца восходом,	棺の遺骸をあとにして
Легким, светлым хороводом	軽やかで晴れやかな輪舞となって
В цепь воздушную свились;	気流に絡み合っている
(...)	
Тихо, тихо вскрылся гроб...	そっとそっと開いた棺…
Что же, что в очах Людмилы?..	一体リュドミーラは何を目にした？

[34] 『レノーレ』の邦訳は井上正蔵訳（「ビュルガー管見と詩抄」成城法学『教養論集』第4号、1974年）を引用した。このほか栗原成郎訳（「死んだ花婿が花嫁を連れ去る話」『スラヴ学論叢』第2号、1997年、6-14頁）、高山宏訳（『夜の勝利　英国ゴシック詞華撰Ⅰ』1984年、27-36頁）などの全訳がある。

[35] ジュコーフスキイの作品からの引用は *Жуковский В.А.* Полное собрание сочинений и писем в 20 томах. М., 2008.により、( )内に巻数と頁数をローマ数字とアラビア数字でそれぞれ記す。和訳は拙訳による。

Ах, невеста, где твой милый?	ああ　花嫁よ　君の恋人はどこに？
Где венчальный твой венец?	君の花嫁の冠はどこに？
Дом твой — гроб; жених — мертвец.	君の住まいは墓　君の花婿は死者
Видит труп оцепенелый:	うつろな屍が見つめている
Прям, недвижим, посинелый,	硬直し　微動だにせず　青ざめて
Длинным саваном обвит.	長い経帷子に包まれた屍
Страшен милый прежде вид;	かつての麗しき姿も今はおぞましい
Впалы мертвые ланиты;	おちくぼんだ死者の両頬
Мутен взор полуоткрытый;	濁った半開きの眼差し
Руки сложены крестом.	十字に組まれた両の手
Вдруг привстал... манит перстом...	突如かすかに身を起こし…指で招く…
«Кончен путь: ко мне, Людмила;	「旅は終わりだ　おいで　リュドミーラ
Нам постель — темна могила;	僕らの新床は暗い墓
Завес — саван гробовой;	とばりは棺の白い覆い
Сладко спать в земле сырой».	湿れる大地のまどろみは甘い」
	(III, 14-15)

また、『スヴェトラーナ』においても、女主人公の夢のなかで死せる花婿が棺から起き上がるさまが描かれる。

Сорвался покров; мертвец	覆いがずり落ちると　死者の
(Лик мрачнее ночи)	（顔かたちはぬばたまの闇）
Виден весь — на лбу венец,	全身があらわとなった ― 額には冠
Затворены очи.	しかと閉じられた両の眼
Вдруг... в устах сомкнутых стон;	不意に…つぐまれた口から呻き声がもれ
Силится раздвинуть он	死者は冷えきった両手を
Руки охладелы...	広げようともがいている…
(...)	
Простонав, заскрежетал	［死者は］うめき声をあげ
Страшно он зубами	恐ろしげに歯軋りをし
И на деву засверкал	乙女に向かい威嚇するかの眼を
Грозными очами...	ぎらつかせはじめた…

Снова бледность на устах;	やがてまた口唇には青白さが戻り
В закатившихся глазах	吊り上った眼には
Смерть изобразилась...	死がまざまざと浮かびあがった…
	(III, 36-37)

なぜ『ガンツ』において、死者の幻影が挿入されたのだろうか。主人公はアテネの廃墟を目のあたりにし、絶望の果てに帰還する。放蕩息子の帰還を思わせる筋の展開には、別の解釈も重ねうる。つまり、ガンツは花嫁ルイーザを残して異界を放浪後、死せる花婿となり、花嫁を迎えに帰還したという解釈である。上述のように、ルイーザが幻視する死者たちの幻影は、死せるガンツの帰郷を暗示するとも解釈できる。

さらに、ルイーザの形象が「窓辺に坐る乙女」として描かれることにも注目したい。『スヴェトラーナ』の同名の女主人公、『オネーギン』のタチヤーナと同様に、ルイーザもしばしば窓辺に坐る。[36]

А что ж она? — Встает она,	だがルイーザは？ — 彼女は起き上がり
Садится прямо у окна:	そのまま窓辺に腰をおろす（I, 78）
Одно окно открыто в нем;	家には開いた窓がひとつ
Облокотясь, пред тем окном	その窓辺に肘をつき
Краса-девица почивает,	美しき乙女がまどろむ（I, 80）
Но посмотри, тиран жестокий:	だが見よ　残酷な暴君よ
Она всё также, под окном,	彼女は今でも窓辺に坐り
Сидит и ждет в тоске глубокой,	深い愁いに沈み待ちわびている
Не промелькнет ли милый в нем.	恋人の姿が見えはしないかと
(…)	
Свирель чуть льется; а она	葦笛の音がかすかに響くも
Сидит недвижно у окна.	彼女は窓辺にじっと坐る（I, 85）

[36] 窓辺に坐るスヴェトラーナやタチヤーナの形象について、詳しくは以下を参照。拙稿「プーシキンと＜レノーレ譚＞」106-108頁。

二年の歳月が流れ、ガンツが帰還するのは真夜中である。再会直前、何者かの気配を感じた女主人公は恐怖に震える。再会の歓喜とその後の婚礼の賑々しさにかき消され、ルイーザの恐怖は忘れ去られるが、果たしてこの恐怖は何に起因するのだろうか。

И вот почудилося ей:
Чудесным заревом очей
Возле нее блистает кто-то,
И слышит вздох она кого-то,
И страх, и дрожь ее берет...
И оглянулась...
„Ганц!“...

ふと彼女は気配を感じた
彼女の傍で煌めく
不思議に燃える誰かの瞳
ふと聞こえる誰かのため息
彼女は恐怖と慄きにとらわれ…
そして振り返った…
「ガンツ！」…
(I, 97)

ルイーザもまた、死せる花婿の訪問を受けたスヴェトラーナのように、異界の気配を感知したのではないだろうか。[37]『スヴェトラーナ』を見てみよう。

Робко в зеркало глядит:
За ее плечами
Кто-то, чудилось, блестит
Яркими глазами...
Занялся от страха дух...
Вдруг в ее влетает слух
Тихий, легкий шёпот:
«Я с тобой, моя краса;

おそるおそる鏡を覗けば
彼女の肩越しに
誰かがどうやら両の眼を
らんらんと輝かせている様子…
恐怖に息も絶え絶え…
突然彼女の耳に
静かで軽やかな声が囁きかける
「いとしい人よ　僕は君のそばにいるよ

37 このほか、オネーギンの書斎に入るタチヤーナを想起させる箇所も見られる。ガンツの離郷後、ルイーザ母子は書斎に足を踏み入れ、その精神生活を垣間見る。ガンツが愛読したのは、古代ギリシア、イタリア、ドイツの哲学者や詩人たちの書物だった。「部屋に入る彼女たち／けれどもそこはもぬけのから／脇に積み重なるのは埃まみれの古書／プラトンや気まぐれなシラー／ペトラルカ、ティーク、アリストパネス／それに忘れ去られたヴィンケルマン（Вот входят в комнату оне; / Но в ней всё пусто. В стороне / Лежит, в густой пыли, том давний, / Платон и Шиллер своенравный, / Петрарка, Тик, Аристофан / Да позабытый Винкельман;）」（I, 83-84）

Укротились небеса; Твой услышан ропот!»	天が静まり返ったので 君のつぶやきが聞きとられたのだ！」 （Ⅲ, 33）

『ガンツ』の物語は若い２人の披露宴でしめくくられ、一見めでたし型の結末を迎える。しかしそこにも完全な平穏は存在しない。

Но что ж опять его туманит? (Как непонятен человек!) Прощаясь с ними он навек, — Как бы по старом друге верном, Грустит в забвении усердном.	しかし一体何が再び彼を惑わすのだ？ （人間とは何と不思議なものよ！） 夢まぼろしと永遠に袂を分かちつつ — まるで忠実な旧友を慕うように すっかり忘れて懐かしむのだから (I, 99)

幸福な婚礼に翳りがさすさまは、『ディカーニカ近郷夜話』所収の『ソロチンツィの定期市』を想起させる。

> しかし、さらに奇怪で不可解な感情が心の奥底に呼び覚まされそうになるのは、快活に笑う若者に紛れて、年老いた顔に墓場の無関心さを貼りつけてひしめく老婆を眺めるような時である。(I, 135)

バフチンが「踊る老体（ほとんど踊る死)」と評した、[38] 陽気なカーニバルに射し込む一条の陰鬱な翳りは、すでに『ガンツ』の結末で顔をのぞかせているようだ。[39] むろん、ゴーゴリはあくまで『ガンツ』を幸福な田園詩として呈示するが、ジュコーフスキイの影を宿した主人公たちには、最後までその属性に不可解さ（ガンツは死せる花婿ではないのか？ガンツに嫁ぐルイーザは果たし

---

38 *Бахтин.* С.512.

39 『ヴィイ』の吸血魔女の美貌もまた、カーニバルのさなかの暗い調べに喩えられる。「あたかも陽気な歓楽のさなか、踊りに興じる群衆の中心で、誰かが不意に虐げられた民のうたを唄い出したかのように。（как будто бы вдруг среди вихря веселья и закружившейся толпы запел кто-нибудь песню об угнетенном народе.）」

て生者なのか？）がつきまとう。

2-2.『イヴァン・クパーラの前夜』[40]

（*Вечер накануне Ивана Купала*, 1830）

『ガンツ・キュヘリガルテン』の挫折を受けて、ゴーゴリは突如ドイツに逐電する。『イヴァン・クパーラの前夜』は、ドイツから帰国後、1830年に『祖国雑記』（Отечественные записки）誌に匿名で掲載された。

孤児ペトロは、奉公先の主人である老コサック・コルジュの娘ピドールカと相愛の仲である。しかし、ピドールカとの逢瀬をコルジュ（ピドールカの父）に目撃され、屋敷を追放される。憤怒に駆られた老父は娘の花婿さがしに躍起になる。悲嘆にくれるピドールカは、幼い弟イヴァシを恋人ペトロの元によこすが、その伝言には死せる花嫁の姿が暗示される。

> 婚礼の準備までしているけれど、私たちの婚礼に音楽は響かないでしょう。コブザやソピルカの音色のかわりに、補祭がお経をあげるでしょう。私は花婿とは踊らずに、運ばれていくの。私が嫁ぐのは暗い暗い百姓家。それは楓の木でできていて、屋根には煙突のかわりに十字架がたつでしょう！（I, 142）[41]

死せる花嫁を示唆するピドールカの呼びかけに、ペトロも呼応するように返答する。

> 俺だって婚礼ぐらいあげられるさ。ただ、その婚礼に補祭は来ない。司祭のかわりに頭上で黒鴉が鳴くだろう。なだらかな平原が俺の百姓家さ。暗い灰色雲が俺の屋根。俺の褐色の瞳を鷲がついばむだろう。雨がコ

---

40 『イヴァン・クパーラの前夜』について、詳しくは以下を参照。Driessen F.C, “Saint John’s Eve” // *Gogol as a short-story writer,* 1965, pp.74-86.

41 コブザはリュート型弦楽器、ソピルカは木管楽器で、どちらもウクライナの民族楽器。

サックの骨を洗い、つむじ風が乾かすだろう。(I, 143)

八方塞がりのペトロは、集落に出没する悪魔バサヴリュークの甘言にのせられ、道を踏み外す。悪魔の言によれば、赤い蕨の花（イヴァン・クパーラ祭前夜にのみ咲く）を摘み、吸血魔女に献上すれば財宝を獲得できるという。ただしそれには条件がある。代償はピドールカの幼い弟イヴァシの生命だった。

「いや、人の生き血をもらうまでは、金貨はあげないよ！」魔女は言った。そして、斬首しろと合図しながら、白いシーツにくるまれた6歳ほどの子供を連れて来た。(...) ペトロの眼はかっと燃え... 頭がもうろうとした...。彼は狂ったようにナイフにとびつき、そして無垢な血がその両眼に飛び散った...。四方から悪魔の哄笑がとどろいた。眼前を醜悪な怪物どもが群れなし跳梁していた。(I, 145-146)

その後、大金を手にしたペトロは、悪魔との取引、異界との接触、自ら犯した殺人の記憶を失う。こうして、ペトロとピドールカの婚姻は異界の助力を得て成立するが、善良な人々は「悪魔から善は生まれぬ」と見透かしていた。1年後のイヴァン・クパーラ前夜、老婆に変身した吸血魔女がペトロの眼前にあらわれ、すべては白日のもとに晒される。記憶の戻ったペトロは灰と化し、財宝も陶器のかけらに戻る。ピドールカの行方は杳として知れず、風の噂では修道院で一心不乱に祈祷する姿が目撃されたと言う。

本作において、花嫁ピドールカを迎えるペトロは、彼岸から帰還した時点ですでに死せる花婿と化していたと解釈される。さらに、花婿と取引する吸血魔女の形象にも注目したい。[42]

---

42 ゴーゴリ作品における魔女の形象については、以下を参照。 *Звездин А*. Образ ведьмы у Гоголя : Фольклорные истоки и средневековая христианская мистика // Гоголь как явление мировой литературы. М., 2003. С.118-127.

魔女は首のない遺体を両手でつかむと、そこから狼のように血をすすった…。（I, 146）

のちの作品で繰りかえし描かれ、『ヴィイ』において完成の域に到達する＜吸血鬼譚＞のモチーフが、すでに本作でも採りいれられている。

2-3.『五月の夜、または身投げした娘』

（*Майская ночь, или Утопленница*, 1829-1830年執筆、1831年発表）

本作の執筆時期は未確定だが、母マリヤ宛書簡などと照合すると、1829年５－７月に書かれたと推測されている。1831年に出版された『夜話』第１部に収録された。

村長の息子レフコは村はずれに住むハンナと恋仲だが、父親（村長）がハンナに言い寄る現場を目撃する。色事師の村長は義妹とも情を通じている。レフコは村の若い衆を巻き込み、父親を懲らしめようと画策する。物語はレフコとハンナの恋愛成就を中心に展開するが、並行的に挿入されるルサールカのエピソードも大きな比重を占める。ハンナの家の傍らにルサールカの棲息池がある。陰気な池の畔に建つ古い木造の館には、かつてコサック中尉一家が住んでいた。しかし、吸血魔女である継母に襲われた中尉の娘は、絶望して身投げし、ルサールカになってしまう。

ふと見ると、恐ろしい黒猫［継母―吸血魔女］が娘の方に忍び寄ってくる。黒猫の毛が燃えあがり、鉄の爪が床を叩いていた。娘が驚いて長椅子にとびあがると、黒猫も追いかける。ベッドにとび移ると、黒猫も後を追う。そして、不意に彼女の首にとびかかると首を絞めにかかった。娘は悲鳴をあげて猫をもぎ離すと、床に投げ捨てた。（I, 157）

私の白い首筋を見てちょうだい。この青痣は洗い落せないの！洗い落せないのよ！この青痣はあの女［継母―吸血魔女］の鉄の爪跡だから、決

して消えないのよ。(I, 175)

娘は死してなお継母の存在に苦しみ、心の平安を得られない。吸血魔女は復讐心に燃える継娘により池にひきこまれるが、咄嗟にルサールカに姿を変え、巧妙に一群の中に身を潜める。吸血魔女を識別する手助けをしたレフコは、返礼として代官の書状を授けられ、恋人たちは無事結ばれる。

以上のように、本作においても、前項『イヴァン・クパーラの前夜』と同様に、＜吸血鬼譚＞のモチーフが挿入されている。

2-4.『クリスマスの前夜』

(*Ночь перед Рождеством*, 1832)

本作は『夜話』第2部に収録された。鍛冶屋のヴァクーラは、裕福なコサック娘オクサーナに想いを寄せるが袖にされ続ける。オクサーナは村一番の美人で、ヴァクーラの求愛に対し、女帝の豪奢な靴を所望する。美女の無理難題に絶望した若者は、死を覚悟し、皆に別れを告げる。

「さようなら、オクサーナ！望みどおりの花婿を探しなよ。誰かれ構わずからかえばいいさ。でも、もうこの世で俺に会うことはないだろうな」(I, 221)

「さようなら、みんな！」と鍛冶屋［ヴァクーラ］は叫び返した。「縁があればあの世で会おう。でもこの世ではもう一緒には遊べまい。さようなら、悪く思わないでおくれ！コンドラト司祭さまに、罪深い俺の魂の供養を頼んでおくれ。(…)」(I, 221)

その後、若者は悪魔の助けをかりて首都ペテルブルグに飛び、首尾よく靴を入手する。ちょうどその頃、村人たちは口々にヴァクーラの死を噂していた。愛されることに傲慢だったオクサーナは、若者に対する自らの仕打ちを深く後

悔する。喪う可能性を前に初めて若者への想いに気づき、思慕は募るばかり。そうこうするうちに、帰還したヴァクーラが求婚に訪れ、父親の許しと花嫁の同意を得て、物語は大団円を迎える。

しかし、一見幸福な結末を迎える本作にも＜レノーレ譚＞のモチーフが観察される。ヴァクーラは悪魔を利用してペテルブルグという彼岸へ赴き、女帝の靴を持ちかえった。若者の不在中にオクサーナの恋心は燃え上がり、ヴァクーラの恋は成就する。しかし、彼岸から帰還した花婿は、元の生者のままだろうか。留守のあいだ、村人たちがヴァクーラの死を話題にするのは偶然だろうか。悪魔に騎乗して帰還した際、疲労困憊した若者が前後不覚の眠りに陥ったのはなぜだろうか。ヴァクーラは、靴（愛の証）を求めてペテルブルグという彼岸へ死出の旅に赴き、死せる花婿として花嫁を迎えに帰還したのではないだろうか。[43]

2-5.『恐ろしき復讐』[44]

（*Страшная месть*, 1831年執筆、1832年発表）

本作の執筆時期も未確定だが、1831年夏、ツァールスコエ・セローでジュコーフスキイやプーシキンと頻繁に行き来していた時期の前後に書かれたと推測されている。『夜話』第２部に収録された。初版には「本当にあった昔話（старинная быль）」との副題が添えられたが、第２版以降は削除された。

コサックの若者ダニーロと若妻カテリーナは、一粒種の息子にも恵まれ、平和に暮らしていた。一家の幸せに翳りが見えはじめたのは、カテリーナの父（ダニーロの義父）が身を寄せるようになってからだ。彼は20年以上の異国遍歴中に魔術を修得した魔術師で、悪い噂が絶えない。実の娘カテリーナに邪な

---

43 ドミトリエヴァは、本作で描かれるウクライナを此岸、ペテルブルグを彼岸と位置づけている（*Дмитриева.* C.140）。また、ドゥシェチキナは、異形の侵入を許す境界的時空間であるクリスマス前夜という時期に着目する（*Душечкина Е.В.* Русский святочный рассказ : Становление жанра. СПб., 1995. C.115-117）。

44 『恐ろしき復讐』について、詳しくは以下を参照。*Белый.* C.313-348. ; *Манн.* Творчество Гоголя. C.40-53. ; Driessen, pp.87-109. ; *Вайскопф*. C.42-46. ; *Малкина.* C.106-111.

情欲を抱いており、自らの異常な愛を夫妻の前でも隠さない。隙あらば婿ダニーロの手から娘を奪還しようと企んでいる。義父との烈しい確執のすえ、ダニーロは銃殺されてしまう。ほどなく魔術師は赤子の生命も奪う。実父に夫と息子を殺害されたカテリーナは正気を失う。狂気のカテリーナが唄う錯綜した歌詞には、死せる花婿と花嫁の冥婚のモチーフが織り込まれている。

だって夫は生きたまま葬られたのよ…。
(…)
血まみれの旅の箱橇が走る
中にはコサックが横たわる
銃で撃たれ斬殺された
右手に槍を握りしめ
その槍から血がほとばしる
血の海がほとばしる
(…)
広い平原の土の窖
そこには窓も扉もない（I, 273-274）

本作は随所にゴシック小説的モチーフ（殺人、亡霊、魔術、呪い、近親相姦など）がちりばめられ、『夜話』のなかでも特異な作品となっている。カテリーナの父は、妻（カテリーナの母）の喉を掻き切って殺害し、のちには孫の喉までも掻き切る。彼は執拗に娘に求愛し、魔力で彼女を籠絡しようとする。しかし、夫ダニーロに忠実なカテリーナは、父の求めに決して応じず、ついには自らも殺害される。最終的に、狂気に満ちた父の妄執と犯罪は、より大枠に設定された祖先の復讐劇に回収される（末尾において、すべての罪科は太古に祖先が犯した義兄弟殺しの報いと判明する）。錯綜する複雑な筋、結末部で示される祖先の罪、一族の呪われた宿命、復讐劇の成就などのモチーフは、ゴシック小説で頻繁に採りいれられてきた。本作において、ゴーゴリはこれらのモチーフを積極的に採用した。冒頭および末尾に挿入される死者の幻影は、徹頭徹尾恐怖の雰囲気に満ちている。

墓上の十字架が揺れると、その中から痩せ衰えた死者が静かに起き上がった。鬚は腰まで伸び、指そのものよりも長い爪が伸びている。死者は静かに両手を持ちあげた。その顔は、全体が震え歪んでいた。おそらく、彼は恐ろしい苦痛を堪えていたのだろう。「苦しい！息苦しい！」と、死者は人間のものではない荒々しい声で呻いた。彼の声はさながら刃のごとく心を掻き毟るものだったが、死者は不意に地下へと潜った。別の十字架が揺れはじめ、再び死者が墓から出て来た。最初の死者より背が高く、より恐ろしげな様子で、全身の毛は伸び放題だった。鬚は膝までとどき、骨ばった爪はさらに長く伸びていた。彼はいちだんと荒々しく「息苦しい！」と叫び、地下へ去って行った。３番目の十字架が揺れはじめ、３番目の死者があらわれた。それは、まるで骨だけが地上に高く突き出たかのようだった。鬚は踵まで伸び、爪の伸びた指が地面に突き刺さっていた。死者は月を掴まんばかりに恐ろしげに両手を掲げ、まるで誰かにその黄色い骨を鋸で挽かれたかのように叫んだ…。(I, 248)

ゴーゴリのゴシック趣味は、『血まみれのバンドゥーラ奏者』（*Кровавый бандурист*, 1830-1832年執筆、未完）を経て、『ヴィイ』へと受け継がれていく。

2-6.『ヴィイ』（*Вий*, 1835）[45]

『ヴィイ』は『ミールゴロド』第２部におさめられた。

キエフのブラツキイ修道院神学校の哲学級生ホマーは、夏休みを利用して出

---

[45] 『ヴィイ』の材源をめぐっては、以下を参照。*Абаев В.И.* Образ Вия в повести Н.В. Гоголя // Русский фольклор. Т.3. М.-Л., 1958. С.303-307. ; *Левкиевская Е.Е.* К вопросу об одной мистификации или гоголевский Вий при свете украинской мифологии // Studia Mythologica Slavica I. 1998. C.307-316. ; *Соколов Б.В.* Нечистая сила «Вия» // Расшифрованный Гоголь. М., 2007. C.23-51. ; Leon Stilman, "The «All-Seeing Eye» in Gogol", Robert A. Maguire, *Gogol from the Twentieth Century*, Princeton, 1974, pp.375-389. ; 諫早、139-145頁。伊東「≪ヴィイ≫―イメージと名称の起源」１-16頁。鈴木晶「すべての女は魔女であることについて―ゴーゴリ『ヴィイ』を読む」『ユリイカ』第16巻第８号、青土社、1984年、103-113頁。このほか、『ヴィイ』については以下も参照。*Гуковский.* C.187-195. ; *Вайскопф.* C.136-167. ; *Соливетти К.* Возрождение Хомы и кривизна мира // Гоголь как явление мировой литературы. М., 2003. C.128-138. ; Driessen, pp.133-165.

張家庭教師の職に就くため、仲間と３人で放浪の旅に出る。道中、神学生たちは街道を逸れ、魔女の住処に迷い込む。その晩、ホマーは魔女を背に乗せ夜空を飛行するが、呪文の力で魔女を返り討つ。キエフの神学校に戻ったホマーは校長に呼び出され、とあるコサック中尉の元に赴くよう命ぜられる。校長の話によると、何者かに殴打され臨終の床にある中尉の娘が、死後３日間の通夜祈祷をホマーに依頼しているという。直感的に災難を察知したホマーは逃亡をはかるも失敗。半ば連行されるように中尉のもとに連れ去られてしまう。目的地の集落到着の翌朝、前夜に死亡した娘と対面したホマーは慄然とする。

> 戦慄がホマーの血管を駆け抜けた。彼の前に横たわっていたのは、かつて地面に横たわっていた、あの美女だった。(...)「魔女だ！」— と彼は自分のものとも思えぬ声で叫んだ。そして脇へ眼を逸らすと、全身青くなりながら祈祷文を読み上げはじめた。それは、まさに彼が殺害したあの魔女に相違なかった。(II, 199)

まもなく、屋敷の使用人たちの噂話から、娘が吸血魔女だったことが判明する。

> 百姓家の真ん中に吊り下げられていた揺りかごには、１歳児が寝ていた。(...)［中尉の娘 — 魔女は］全身真っ蒼で、両目は石炭のように爛々と燃えていた。彼女は子供を掴まえると、のどを喰い破り、生き血を吸い始めた。(...) 次に、愚かなおかみさんにかみついた。朝方シェプトゥンが自分のおかみさんを引きずり出してみると、全身かみつくされ真っ蒼になっていた。翌朝愚かなおかみさんは亡くなった。(II, 204-205)

> 魔女の噂話は尽きることがなかった。(...)生き血を桶に数杯分も吸われた人々がいるらしい、などなど。(II, 205)

吸血魔女とホマーの攻防は３晩つづく。最初の晩、吸血魔女は棺から起き上がり、ホマーを探し出そうと躍起になるが、彼は魔法陣と呪文の力で難を逃れる。

> しかし確かに彼女［死者］はもう横たわっていない。棺のなかに坐っている。彼は眼を逸らし、再びこわごわと棺に眼をやった。彼女は立ち上がり… 眼を閉じたままで堂内を歩いている。まるで誰かを捉えようとするように、しきりと両手を伸ばしている。(…) 彼女は恐ろしい様子だった。ガチガチと歯噛みしながら、死せる眼を見開いた。しかし何も見えないので半狂乱になりながら ― それは震えだした顔が物語っていた ― 踵を返すと両手を伸ばし、どうにかホマーを捕まえようと、そこらじゅうの柱や角を掴んでいた。しかし、とうとう立ちどまると、指で脅す仕草をしてから自分の棺に横たわった。(…) 蒼褪め緑がかった屍体は、ふたたび棺から起き上がった。(II, 207-208)

２晩目には、吸血魔女の方でも呪文を唱え、ありとあらゆる魑魅魍魎を召喚する。[46] あまりの恐怖に、ホマーの頭髪はひと晩で白髪になってしまう。

> 屍体はもうホマーの眼前の［魔法陣の］線上に立ち、彼に向けて緑色に変色した死せる眼をこらしていた。(…) 教会の窓ガラスや鉄製の窓枠に翼が打ちつけられ、金切声をあげて鉤爪で鉄をひっかく音が聞こえた。さらに、無数の力が扉を壊し教会内に押し入ろうとしている様子が聞こえた。(II, 210)

---

[46] グコフスキイは、この部分の描写に、サウジー（Robert Southey, 1774-1843）の『バークレーの老婆』（*The Old Woman of Berkeley. A Ballad, Showing How an Old Woman Rode Double, and Who Rode Before Her,* 1799）のジュコーフスキイによる翻案詩（*Баллада, в которой описывается, как одна старушка ехала на черном коне вдвоем и кто сидел впереди,* 1814）からの影響を見ている（*Гуковский*. С.190）。

第３夜。ホマーに勝機はない。吸血魔女はふたたび棺から起き上がり、あらゆる怪異を呼び寄せる。

> 不意に... 静寂のさなかに... 棺の鉄蓋がめりめりと音を立てて弾け飛び、死者が起き上がった。死者は最初の時よりさらに恐ろしい様子だった。上下の歯が恐ろしげな音を立て軋りあっていた。その唇は痙攣に引き攣り、荒々しい金切声をあげ呪文を唱えていた。(II, 216)

吸血魔女は、最終手段として妖怪の首領ヴィイを召喚する。ヴィイは、ゴーゴリの自註によれば「地面に垂れ下がる両まぶたを持つグノムの親玉」(II, 175) であり、凶眼の持ち主である。[47] 生者であるホマーは決してヴィイを見てはならなかったが、怖いもの見たさ故か、辛抱できず見てしまう。それがホマーの命とりとなる。

> 「ほらここにいる！」とヴィイは叫び、鉄の指でホマーを指ししめした。すると、そこに居合わせた、あらん限りのものどもが哲学級生［ホマー］に襲いかかった。ホマーは息絶えて地面に倒れ、恐怖のあまり即座に魂は身体を抜け出てしまった。(II, 217)

こうして吸血魔女は本懐を遂げ、狙い定めた花婿（ホマー）を彼岸に連れ去る。魔女の情念・執念はすさまじい。３日３晩ホマーを探し求め、棺の舟に乗って教会堂内を縦横に飛びまわり、最後はヴィイの眼力をかりて生者を彼岸に連れ去りゆく。

---

47 マンはドイツ・ロマン派の影響を指摘する。また、栗原はロシア正教の聖者カシヤーン、ウクライナ伝説のブニャクとの類似を指摘している（栗原成郎『ロシア民俗夜話』丸善、1996年、85－89頁）。グノムは、未完作品『血まみれのバンドゥーラ奏者』でも描かれる。

むすび

ゴーゴリは、『ディカーニカ近郷夜話』所収の諸作品、および『ヴィイ』などにおいて、悪魔、魔女、魔術師などが跳梁跋扈する世界をゆたかに描き出した。『夜話』で繰りひろげられる世界は、バフチンやマンも指摘するように、祝祭的笑いと賑々しい祝宴に彩られた真昼の世界である。本稿では、そのような白昼の世界に闖入する闇の諸相を捉えようと試みた。いっぽう、『恐ろしき復讐』や『ヴィイ』で描かれる世界は、それまでの『夜話』のカーニバル的雰囲気を一変させるような、恐怖が支配する闇の世界である。『ヴィイ』の暗黒世界を飛翔するのは、赤子とその母親の生き血を吸う吸血鬼であり、死してなお主人公ホマーを墓場に連れ去ろうと心を砕く魔女である。『ヴィイ』において、ゴーゴリの＜レノーレ譚＞はひとつの完成形を見たと言えよう。[48]

本稿では、ゴーゴリと＜レノーレ譚＞、＜吸血鬼譚＞の関係について、伝記的事実に照らしながら考察した。その上で、それらがどのように具体的作品に反映されたかを検討した。ジュコーフスキイやプーシキンからゴーゴリに受け継がれたロシアの＜レノーレ譚＞の伝統は、その後 A.K.トルストイ（Алексей Константинович Толстой, 1817‐1875）、トゥルゲーネフ（Иван Сергеевич Тургенев, 1818-1883）などに引き継がれるが、それらの考察は次稿の課題としたい。

---

48 『ヴィイ』が収められた『ミールゴロド』の表紙には「『ディカーニカ近郷夜話』の続編をなす中篇小説集（Повести, служащие продолжением Вечеров на хуторе близ Диканьки）」と明記されている。